

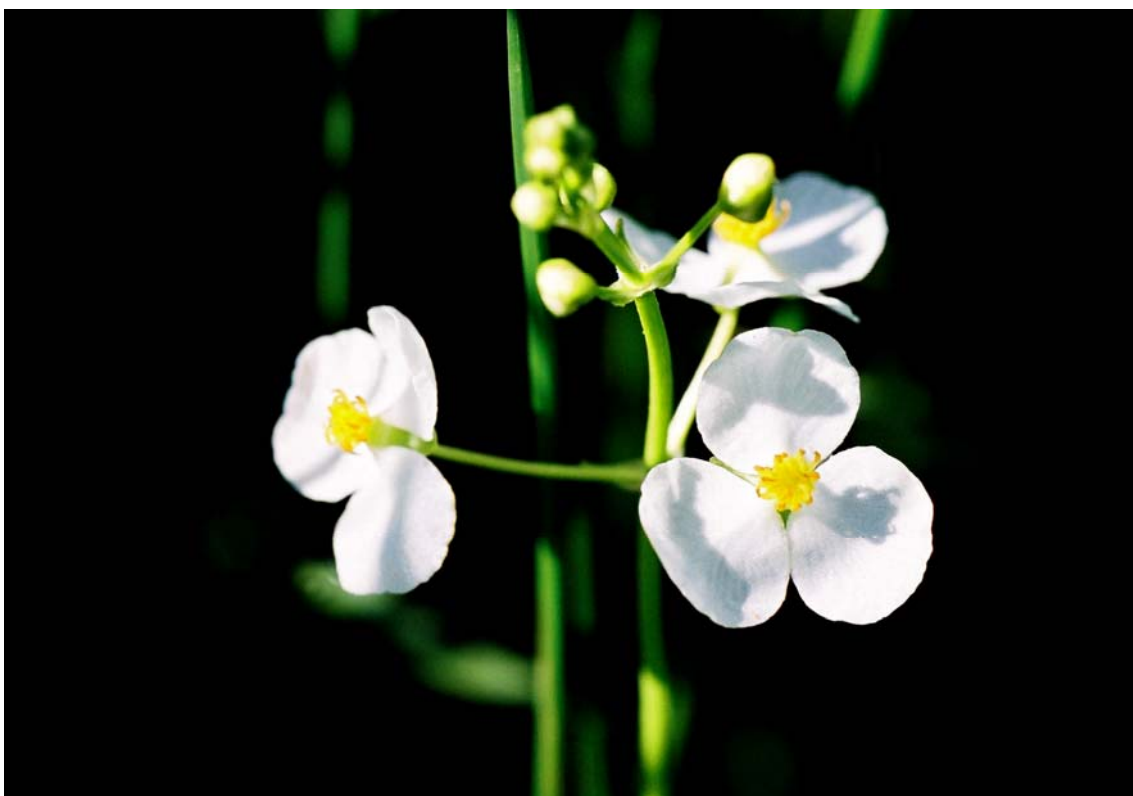
13) クワイとオモダカ=慈姑と沢瀉

クワイもオモダカもオモダカソウ科の水生多年草で、クワイはオモダカの変種と見るのが妥当である。クワイの原産地は中国で、根茎を食用とするために日本や中国では水田で栽培されている。高さは60~90cmで、葉身は三角形の鏟(ヤジリ)形をしており、長さは30~40cm、葉柄は50~70cmと長く、基部が鞘状になっている。夏から秋にかけて、稀に葉身から花茎を出して白色の3弁花を円錐状に咲かせ、花茎の上部には雄花を、下部には雌花をつける。泥中に地下茎を伸ばして繁殖し、秋、先端に球状の塊茎をつけ、地下茎は淡い青色をしている。晩秋に地上部が枯れてから収穫を初め、春までに掘り取る。和名の由来は鋤芋(クワイモ)の略とか、葉と葉柄の形を農具の鋤に見立てたとか、葉がイに似ており食用になるためとか諸説がある。別称としてシログワイ、ゴワイ、クワノダイクサ、タイモ、アギナシなどがある。学名は『*Sagittaria trifolia*』で、属名は「矢」に由来し、種小辞は「三葉の」という意味で葉の形状に因む。イギリスでも『chinese arrowhead』で、葉の形から名付けられており、別称として『swanp potato』ともいわれ、こちらの方は「沼地のジャガイモ」という意味である。中国では『慈姑』であるが、これは根茎の増えかたが、慈母が子に乳を与える様子に似ていることによるためだという。

クワイの塊茎には翌年に伸びる芽がついており、これを芽が出る、めでたいとして縁起物の野菜とされてきた。このため正月料理には欠かせない食材で、ほのかに甘い独特の苦みがあり、キントンなどにされる他、祝儀の折詰などにされている。日本にはかなり古い時代に中国から伝来し、平安時代にはすでに栽培されていた。925年頃に記された『和名類聚鈔』には「久和為(クワイ)水中より生ず。沢瀉の類なり。」と記され、貝原益軒が江戸時代の中頃に記した『大和本草』には「慈姑、其子は根蔓の末より生ず。旧本はかれて母子はのこりて、また来春生ず。水田に多くうゑて利とす。甚だ繁生す。味美し。」と記述されている。

乾燥した慈姑の根茎は煎じて産後の子宮出血や、膀胱結石、利尿剤などにも用い、液汁は火傷に効くといわれている。また俗に慈姑のキントンという言葉がある。これは理解しにくいこと、納得しにくいことのたとえで、慈姑でキントンを作ると、見かけは栗キントンに似ているが、なかなか喉を通らないためである。そっけない人間を形容するときにも用いられる。

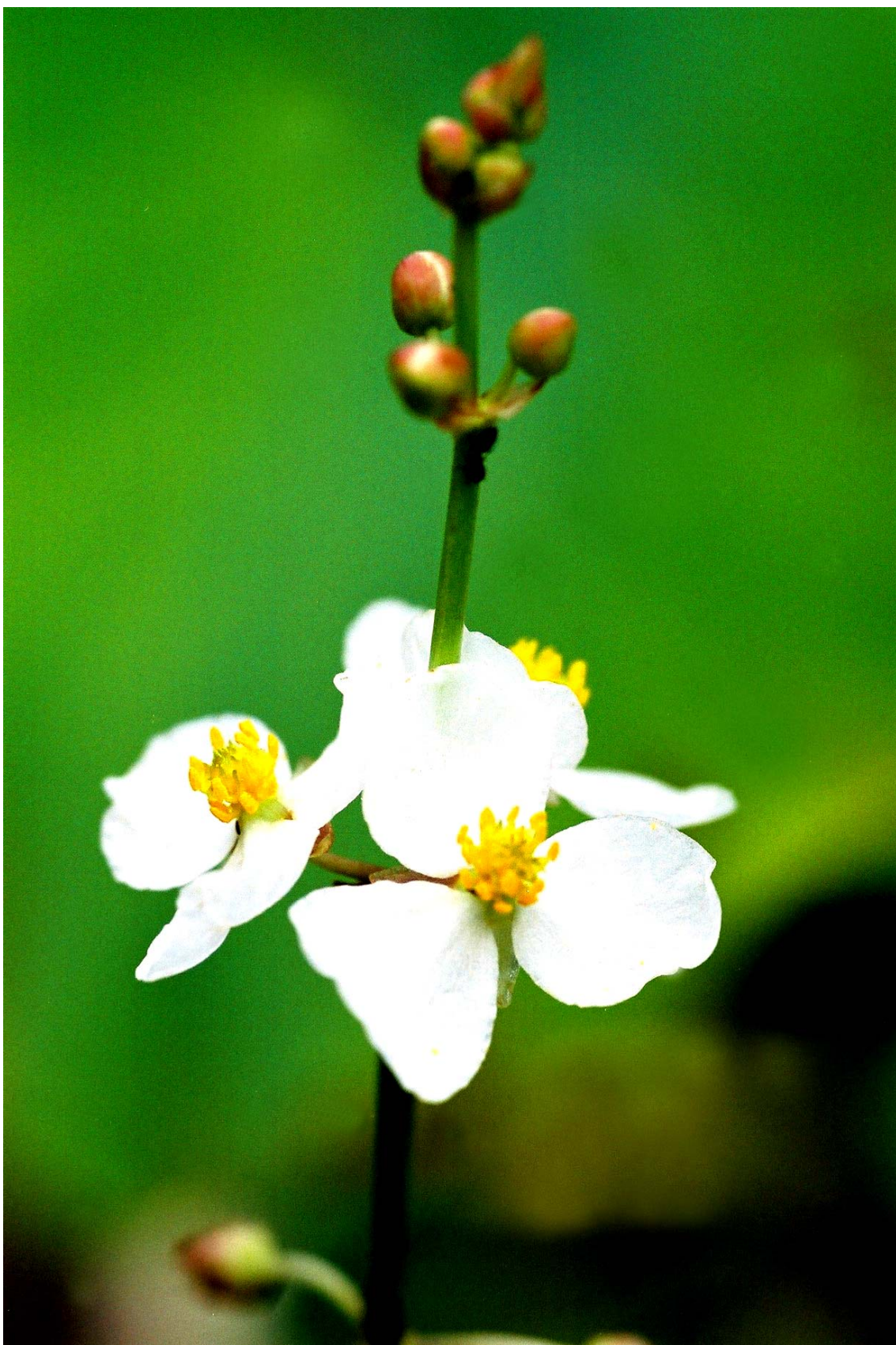
一方オモダカはクワイによく似ているが、日本各地の水田や池沼に生える。和名の由来は鏟形をした葉身の形が、人の顔に似ているとする説、「面高」のことで葉の表が高く膨らんでいるためとする説、「表高」のことで、葉が水面より上に出ているためとする説などがある。クワイが食料として重宝されたのと対照的に、オモダカは花や葉をデザインの素材として用いてきた。特に家紋として『抱き沢瀉』『沢瀉巴』『五葉沢瀉』『違い沢瀉』『向かい沢瀉』など、さまざまなものがある。



クワイは平安時代の初めごろ大陸から日本に伝来したらしい。アジアをはじめヨーロッパやアメリカにも産するものの、食用にするのは主に日本と中国である(長野県佐久穂町)。



クワイの花は美しいため欧米ではむしろ観賞用として栽培されている(長野県佐久穂町)。



オモダカは最近では増えすぎて田んぼの厄介者になっている(埼玉県羽生市)。

[目次に戻る](#)